寫眞週報

内閣情報部編輯
九月廿七日・第八十四號・十セン

銃後後援特輯

アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp/

十月三日から九日まで一週間、銃後後援強化週間が行はれる。いふまでもなく、現下の複雑多難な國際情勢の裡に、わが國が一大躍進を遂げ興亞聖戰の目的を達成するには、一億の民が心を協せ戰線と銃後がほんとうに力強く結ばれてこそ、はじめてそれは可能なのである。

一年前の昭和十三年十月三日は、最も軍人援護に關する勅語を賜はつた日である。われ／＼はこの聖旨を永體し軍人援護の精神を今後の週間中に限ることなく、われ／＼の日常生活を通して永續のものとし銃後の道德として確立しなければならない。

大陸に散華した英靈を追悼し、その勇士の手をその足を國家に捧げた傷痍の手となり足となり、又わが國傳統の美德たる隣保相扶の心操をより組織的な强力なものとし應召遺族家族の生活支援を官民協力で徹底化することは、とりもなほさず第一線將兵の後顧の憂をなくすることであり、銃をとらず內地に安穩の生活を樂しめるわれ／＼に課せられた尊い義務でもあり、こゝにはじめて銃後國民も亦前線將兵の勞苦の一端を分擔することが出來るといへよう

凜々と湧く温泉に浸り、杖に託しては白砂に歩を運ぶ。白衣を脫いでなほ傷病の身を案ふ人たちに、南海の潮風はあくまでも和やかに爽やかに吹きすぎる——白濱温泉療養所にて

撮影 鈴木 實

疲れ易い眼を
うせまりは勞

殘暑期の激しい光線があなたの眼を蝕み 職場の多忙が視力の低下と眼疾を植付けます！

疲は効藥いよ快のルイマス
眼、しや醫にかや爽を目れ
疾眼てい除を症炎血充の內
夕朝ノすまし防豫し療治を
課一第の化强力視は眼點の

新藥科眼

ルイマス

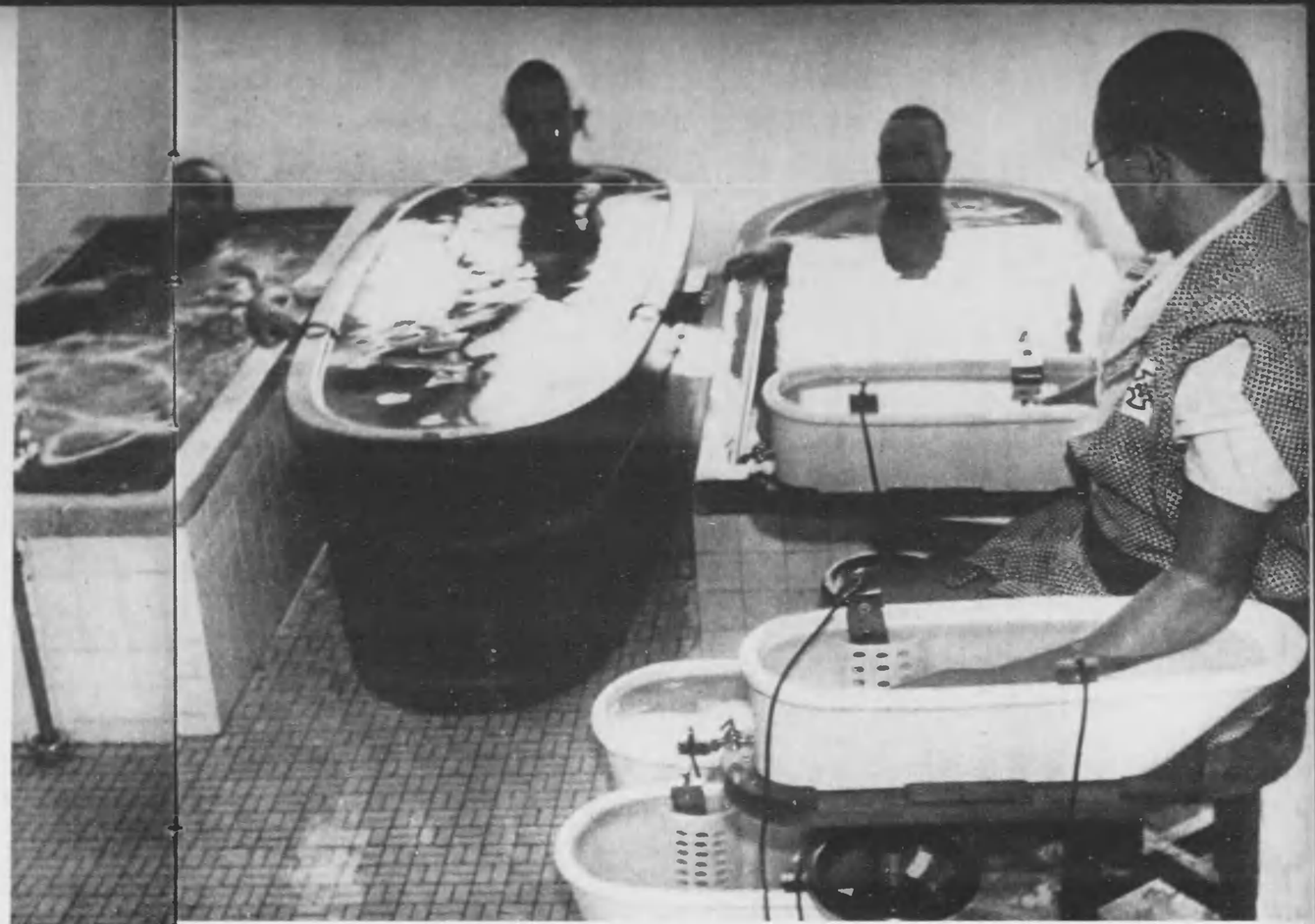
店商置 王 社會式株 ▮ 店理代總 ■七五十四・ンセ二

アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp/

カフトは軍人傷痍記章

いで湯に癒す

傷痍軍人白濱溫泉療養所



撮影　鈴木實

⇧水治療浴室は四人四様のボーズで……右から四肢浴槽、藥槽、電氣浴槽、泡沫浴槽

⇩三方ガラスの大浴室で溫泉に汗流す治療患者はメキ〳〵治癒してゆく。その快味に思はずロづさむ軍歌に戰友を思ひ出す

白衣の勇士のうちには日ならずして戰傷病がよくなり、退院の上勇躍戰地に向ふ人もあるが、除役となつて郷里へ歸り銃後の一國民として生活戰線に立つて活動する人々も多い。

しかし傷病がよくなつて社會へ出たのちでも季節の變り目になつて痛み出したり、或は病後の衰弱がひどくて生活戰線から落伍する場合がないだらうか。

九月十七日入所を始めた軍事保護院の傷痍軍人白濱溫泉療養所はさうした傷痍軍人が後顧の憂ひなく十分の溫泉治療をうけ、再び職業戰線に立ちうるやうにと、設立されたものである。

黑潮躍る南海、紀州田邊灣を一望に收める白濱端田山の療養所は近代溫泉治療の粹を盡した設備と風光に惠まれた理想的なものである。

端田山に或は白砂青松の磯邊に自ら勞はりつゝ歩を運ぶ傷痍軍人の前には希望の道が遙かに拓けてゐる

柔かい傾斜面の仰臥湯槽には煉々と秋晴れの陽が差込む。あの時俺はね……と、おらが手柄話も湯のけむりに湧きあがる

⇧

物療機械室は全く大人の玩具部屋である。右から肩の關節をゆるやかにする肩胛關節運動機、足の關節をやはらかにする足關節運動機、居ながらにして自轉車競走の出來る全身運動機

⇩

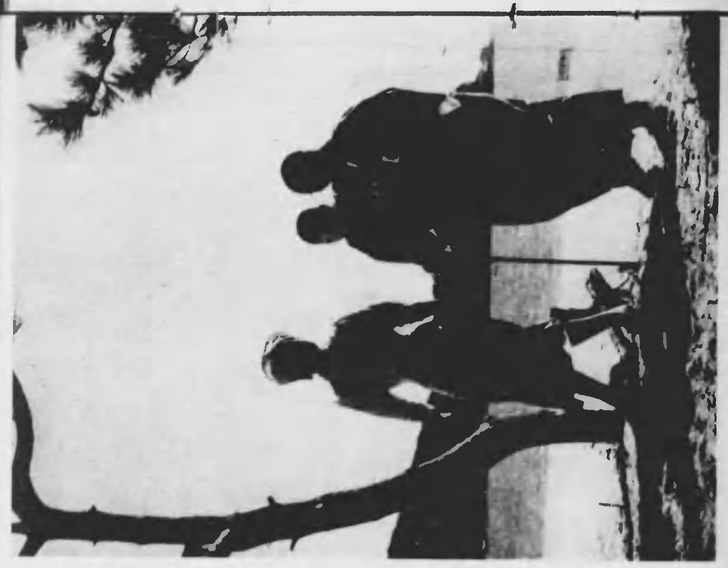
アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp/

美しい紺碧の港、陽の光に輝くそびえる。大口あいて打ち興じてゆくスペルコーナーの数々

海に癒す

香ただよう煙草の煙。煙草の紅茶は何だか生ぬるい。事業の裏面の話。煙草の紅茶は何だか生ぬるい。もう一度どうぞ。煙草の紅茶はいかがですか。

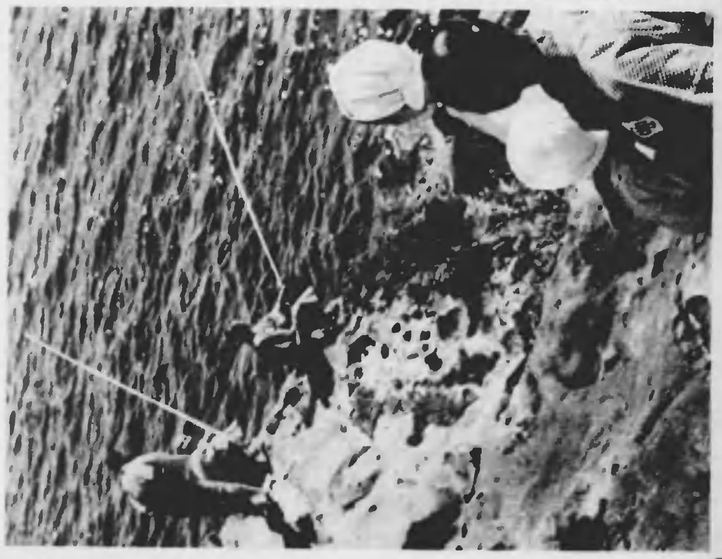
の愛に子供と無心の遊び戯れる家族の人々を楽しいて遊戯や秋も一杯に楽しむ海の潮ひ戯けて海の音遊戯や一所懸命の海の潮ひ戯けて海の音遊戯や



手の不自由と足の不自由な二人は相手を迎えり相手だけ白砂吉鉄の港ひゃかすつもりか、海産物のさんは、

「仲のいーこと……」

二人の間には明らかな笑が漂く



海岸を一つにな書籍を眺めて居る人釣に人釣れるか釣、釣は楽しい。海鉄の釣に何が釣れるか米を釣れ楽しく国大会釣も何物を釣ったかとた海でゆく（下左）

アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp/

鐵腕に振ふハンマー

傷痍軍人 大阪職業補導所

傷病も治癒して除役となつた傷痍軍人のなかには負傷の種類、程度によつて元の職業にかへれる者と、また新らしい職業を覚えなければならぬ者がある。

かうした傷痍軍人のうちから傷病が比較的重い者を中心にして、これに軽い者でも比較的長期かつ高度の教育を志望する者のために東京、大阪及び福岡に國立の職業補導所が設けられた。

大阪府堺市の傷痍軍人職業補導所は定員二百名で洋服、洋裁、家具工藝、工場經理、製圖、精密機械、旋盤、仕上、フライス、鉋盤の十科目の職業再教育を行つてゐる。

旋盤を操る不自由な手、ミシンを踏む不自由な足には傷兵として社會の夢はりに甘んずることなく、傷ついてなほ銃後國民の一員として職ひ拔かうとする不屈の戰場魂を燃えあがらせ二ケ年の研鑽を積むのである

撮影 鈴木 實

1 朝のお出かけ
この補導所は原則として寄宿教育であるが妻帯者で特殊事情にある者は自宅から通ふ。
お父さん、行つていらつしやい。子供のために——不自由な手に自轉車のハンドルを握る

2 適性檢査
各人の希望は參酌するが、以前の職業で或程度まで基礎のあるものには適性檢査が必要である。旋盤工に向くだらうか？

3 ハンマー作業
傷ついた腕にもハンマーが振へるやうになつた。機械工となる基本作業のハンマーに力がぐつともる

4 民謡體操
傷で硬直した體も民謡をロづさみながら踊るうちに何時かは柔らかになる樂しい巧體運動

5 旋盤を征服
育管鉄創に右手の握力を失つたものも旺盛な意志と精巧な補助器で握力を取戻し、立派に旋盤を使ひこなす

6 フライス
足が不自由でも時々椅子に掛ければフライスを操る一日の勞働に耐へる

アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp/

坊やお母さんは先生よ

未亡人のための特設教員養成所訪問記

可愛い妹たちのやうな女子師範生と食卓を竝べて一緒に食べた御馳當の後で、彼女達は師範生の彈くオルガンに合はせて唱歌を歌ふ。樂譜のよみ方も忘れてゐた。オルガンの彈き方もこれからしつかり練習しよう

今夜も彼女は愛兒と竝んで夫の冥福を祈る。御安心下さいませ、私はきつと貴方の名を恥しめないやう立派に教育者となつてお國につくします。武子もこんなに元氣です。

愛兒の合はせる紅葉のやうな掌をみて、母の瞳はふと熱いものにくもる

はりまう、若い人たちに負けぬ事を誓つた母親の眼は食ひ込むやうに

東京女子師範學校内に開設された東京特設小學校教員養成所の入所式は九月十一日女子師範講堂で行はれた。入所生徒凡そ二十一名、所長が入所に當つての心得を懇情をこめて淳々と說けば、亡き夫を想ひつゝ聽き入る彼女たちに感激の嗚咽さへ洩れる

この枠を右へねぢれば空氣がよく入つて火力が強くなります。

先生からきくブンゼン燈の說明に彼女たちは數年か前女學校で習つた化學のペーチを次々と思ひ出す

私たちは再び生徒だ、女學生なのだ、獨りあれば鬼角蘇へる悲しい思ひ出を彼女達は敢然とふりはらつて眩しいばかりの校庭に出た。

バスケット、おやりになりません？

女子師範生の卒直な誘ひに彼女たちもすなほに組に入つて力限りボールを投げあげてみた。

幾年振りに投げるボールであらう、幾年振りかに彼女達は明朗無心の女學生の昔に還れたのだ

撮影吉田彙

大陸の戰野に興亞の礎として散華した戰歿將士の未亡人たちに教育家として榮譽ある家門を守り、國に報ずる道を得させ、又經濟的にも自活の道を開かせようと、このほど軍事保護院の手で東京に特設中等教員養成所、東京他五ケ所に特設小學校教員養成所が開設された。

學窓を出でゝ幾年、いま又新らしく學窓の人となつた彼女たちは既に大半幾人かの愛兒の母である。その母の身でわづか一ケ年の修業期間中に學校教員としての資格をおさめねばならない。愛兒を家に殘す心配、育てゝゆく苦勞もある。書物に向つては年齢的な不利も感じるであらう。

しかし、既にけなげなスタートを切つた彼女たちは、かつての悲みを克服し、朗らかな女學生時代の昔に還つて人生再出發の希望に燃えつゝたゞ一心不亂の努力をつゞけてゐる

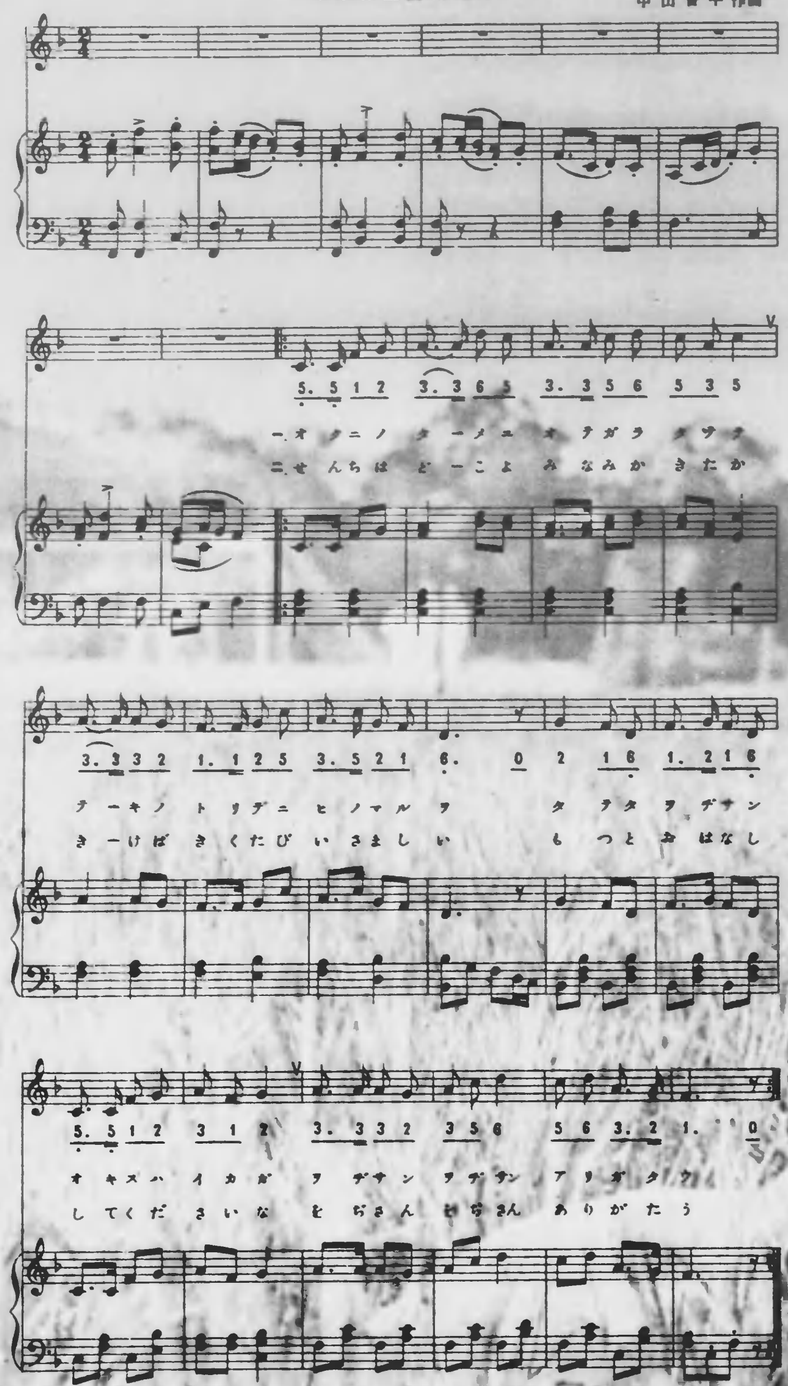
アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp/

をぢさんありがたう

（傷病の勇士に捧ぐ）

——軍事保護院選定——

土岐善麿作詩
中山晋平作曲



一 お國のために
敵のとりでに
立てたをぢさん
をぢさん　をぢさん
戰地はどこよ
聞けば聞くたび
もつとお話

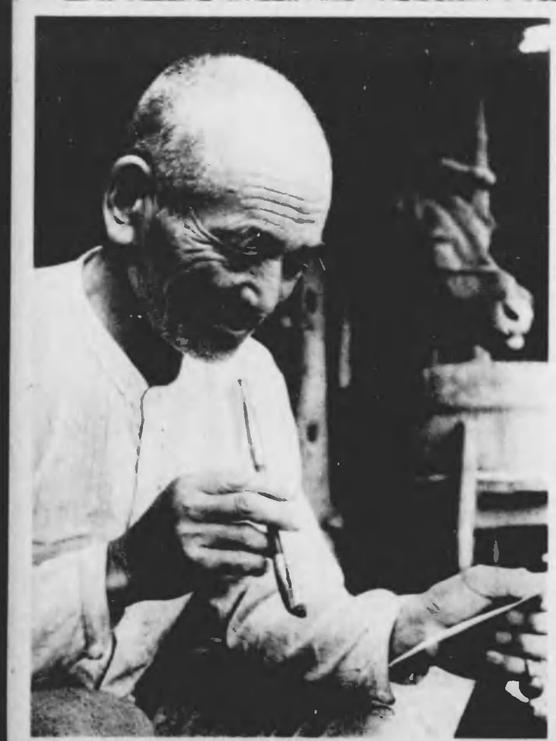
二 をぢさん　をぢさん
お勳のうへの
誉の兜の
かざるをぢさん
をぢさん　をぢさん
四國を護つた
をぢさん
手にも足にも
をぢさん　をぢさん
五 野にも山にも
荒波萬象
踏め進めや
をぢさん　をぢさん

お手柄たてて
日の丸を
お傷はいかが
ありがたう
南か北か
勇ましい
して下さいな
ありがたう
記章をみれば
いくさ神
名譽のしるし
ありがたう
傷兵さん
元氣なお仕事の
皆なりませう
ありがたう
おふねも空も
勝ちいくさ
戰場のなかに
ありがたう

アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp/

勇士よ銃後は大丈夫

農村の妻女より



たゞ今おハガキを受けとりました。消印の日附を見ますと、二週間以上もかゝつてこちらに届きましたそうですが、又々御出動とのこと、存分のお働きをお願ひ申しあげます。お便りのなかに支郎の梨をお食べになつて、こちらの長十郎梨を想ひ出しなさつたとのこと、村でも梨はやつとこの二三日でかたがつきました。私も今、仙太といつしよに町の組合までリヤカーを引つぱつて帰つてきたところです。今年の夏はほとんど雨が降りませんでしたがその割には出来がよく、それに値はなか〳〵よいので喜んでゐます。それにつけてもあなたさまの御留守中、婦會のみなさまや婦人會の方々が、自分らの家よりもまづ應召家族や遺族の方が先だといつて、梨のとりいれの前にも何回もボルドー液をわさ〳〵もつて來て梨畑の手入れをして下され、箱づめの時なんか五人も處女會の人たちが來てくれて、ほんとうに大助かりをいたしました。おついでの時、あなたさまからもよくお礼を書いていたゞけましたらと思ひます。

この二三日、すつかり秋めいてまゐりましたが、戰地の方はいかゞですか。當地の山々は夏の間の黒い色から段々と青みがかつてきて稲もすつかり黄金色にふさ〳〵とみのり、あと半月もしたらかり入れが始まります。

お父さまも達者で、いま野良から帰つたばかりですが、早速あなたさまのお便りを牛小舎の軒先で讀んでゐらつしやいますが、その樣子をこちらから見ますと、それでもあなたの御留守中、いく分目が遠くおなりになりましたでせうか。

仙太は相變らず元氣ですが、何しろ腕白さかりで、ハラ〳〵してしまふこともございます。それから家の豚が月はじめ仔を八匹うみました。目もまださだかでない仔豚が、母豚の乳をしたつて鳴く聲で豚小舎は一日中賑やかなことです。

それから、昨日は、村の喜作さんが二年二ケ月ぶりで歸還され、わざ〳〵家に訪ねて見えられました。奥滿上陸以來、あの方もずゐ分ながい間の御奉公でしたが昨日故郷にかへられたのです。顔がもう何といふかすつかり大陸灼けして了ひ、上等兵ですがすつかり部隊長ひげを生やしてしまつて、留守中のことをいろ〳〵感謝され、あなたさまにも是非是非よろしくとのことでした。

右、亂筆ながら近況お報せまで。こちらはしつかりやつてをりますから、あなたさまもよく〳〵御奮闘のほどお祈り申しあげます。

撮影 内閣情報部

アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Redords
http://www.jacar.go.jp/

勇士よ銃後は大丈夫

都會の小僧さんより

旦那さま、元氣でいらつしやいますか、御無沙汰ばかりしてゐて相濟みません。

今日は、お顧客のお菓子屋さん、包裝紙の配達も一段落しましたので最近のこちらの便りを申しあげます。

この間中、東京は殺暑といつても暑すぎる猛烈なお天氣ばかりつゞきましたが、この四五日やうやく秋らしい空の澄んだ爽々しい陽氣になつて參りました。お内儀さんは夏ちよつとお腹をこわして弱つていらつしやいましたが、この頃はほんとに元氣で、包裝紙の裁斷やら、帳付やらよくこんなに働けるもんだと私たちが感まけするくらゐ商賣に精出してゐらつしやいます。朝はみんな六時には起きますし、夜は十二時すぎまでお内儀さんの起きてゐられるのも珍らしくありません。しかし、お内儀さんのお手紙で御存知のことゝ思ひますが、旦那樣御出征以來、お内儀さんはじめ私ら皆が一生懸命働いたお蔭と、皆さんの御同情で御顧客もへる所か次第にふえて、御出征の當時、百五十軒のお顧客が今では百六十軒を越さうとしてをりますから、その點は、どうか〳〵御安心下さい。

それに先月あたりから、よく家の事情を知つてゐるお顧客さんは、女手と小僧だけでは集金も大へんだらうと、わざ〳〵判取帳をもつて賣掛金を屆けて下さるところも少くありません。

今思ひ出すと坊ちやんも旦那さま御出征の當時はやつと誕生をむかへたばかりでしたのに、今ではすつかり利かん氣のヤンチヤになつて、鐵兜をかぶつてそこら中樂書きしたり、近所の子供と喧嘩とりどつこをやつてゐます。もうこの頃では兵隊ちやんになるんだといつて大へんな元氣です。

御出征の當初は、お内儀さんも勘定元帳のしめくゝりが慣れないので、すゐ分天手古舞されたものですが、この春、裏の乾物屋さんの御隠居が、お内儀さんの手をとるやうに帳簿記入を教へて下さつて以來、今ではわきで見てゐても全く板について、あざやかなものですが、こゝまでなるのには言ひ知れぬ御苦心があつたと思ひます。

たゞ今、この手紙を書いてをりますと、それではいつしよに慰問袋を送りませうとおつしやつて、お内儀さんは旦那さま御好物のゆであづきのかんづめや羊かんを買つていらつしやいました。いつしよにお送りいたします。

私たちは一生懸命銃後をがんばつてをりますから、どうか御勇戰のほどひとへにお願ひ申しあげます。

撮影 内閣情報部

アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp/

遥かなる祈り

芹澤光治良

長男の新一が應召した時、父は、次男の向ふの、基會所へ通つてゐた習慣を、の誠二が應召してくれたならと、呟いてゐた。

そんな風に身勝手な父を、美代はいつも情けなく思ふ。誠二兄さんがやくざだといふのも、お父さまが身勝手にさう決めこんでゐるので、兄さんには兄さんの眞實があるが、お父さまは知らうともなさらない。

新一が出征してから、父は多年路切りぶつつり止めて、毎日、縁側の日向で、老眼鏡をかけて、朝から新聞を丹念に讀んでゐる。戰況の進展に、眞劍に關心を持つやうになつたのもつともなことだと、美代は縁側に暖布がけをするにも、音をたてないやうに氣を配るが、父は驚いたやうに目をあげることがある。

居睡つてゐたのを、てれかくしにかこと音をたてゝ新聞の三面をあけたりする。朝からねむるのも、長男の出征したことが、芯にこたえて疲れたからでせうと、見ぬふりをするが、頑張りませうねと、ほんとうに父に話しかけて勵ましたいくらゐである。しかし、さう勵ましたら、白い髭に唾をつけて、わしはまだ若い者に負けないといつて、却つて叱られるにきまつてゐる。

午後は、それでも、古い碁盤を持ち出して、新聞の圍碁欄をひらげては獨り石をならべて樂しんでゐる時が多い。その頃新聞には本因坊と木谷七段との對戰がくりひろげられてゐた。父は白を持つていつも本因坊になつたつもりである。

觀戰記は讀まない。本因坊になりすまして、次の一手を半日も考へるほど熱心であるが、次の日の名人の石を見て、「さうか、さうか、やつぱり」と、思はず唸ることがある。美代は苦雛しながらその唸聲におどろかされて、心配してそつと覗のすきからのぞいて見ると、父は碁盤の前にきちんと端坐して碁盤をにらんでゐる。その凛々しい風貌は、地方の縣廳の農務課に、三十年近くも勤官として勤務し、恩給年限もすぎてから、子供の教育費を東京へ送るよりも一家擧つて東京へ移つた方が經濟的であるからとて、やむなく退官した、役人の古手には見えない。やはり、その地方での豪農の三男である古い血統が、年をとるとともに風貌に立派ににじみ出て來たのかも知れない。

東京へ出てからも、僅かな恩給では生活に窮して、分家する時に分けてもらつた故郷の田地などを少しづつ賣つて、子供の學資に給した。田地を子賣に代へるのだと考へてゐた。三十年間、役所で學校出と學校を出ないものとの不公平な立身出世振りを、身をもつて體驗した父は子供の學費に先祖から遺贈せられた財產を、注ぐことはもとより、何を犧牲にしても惜しまなかつた。

子賣といふが、父は新一と誠二を名實ともに賣にするために、不動產を賣りつくし漸く新一もサラリーマンとなつて、安堵したやうな時に、應召したのである。

美代は父が碁會所に行かずに、新聞碁を唯一の慰安にするのも、小遣が不如意だからと知つて、お氣の毒に思ふ。

毎晩の晩酌も二本を一本にした。その一本も、母は父の氣の付かないやうに注意して量を次第にへらして行つた。父はそれを知つて、最後の一滴を盃についでしまふときまつて母の顏を不審さうな目で見る。酒をたしなむ者は酒には意地きたなくなるので、ふだんならば無氣になつて母を敏鳴るのだが、父は一心に白い

「紙をはいで來い」

さう敏鳴つて、階段の方を指した。母はすなほに、二階へあがつて紙をはいだ。

「新一もゐないことですし、二階へどなたかお世話しようと思ひましたが……」

母は恐る恐るさう云つたが、下宿人を置いて、經濟的な困難を、多少でも耐へようといふ考だつた。

「家庭のなかへ、何處の馬の骨か分らない人間を、平氣で入れておけるか」

「新一たちも、東京へ來たときは、人さんのお宅へご厄介になつたのですから」

「二階の座敷へは……新一が戻つて來るじやないか。馬鹿な」

凱旋するまで、誰かに貸したいと、母はなほも主張したかつたが、新一の部屋へ他人を入れたら、歸つて來ないかも知れないと、ふと迷信らしく、不吉な豫感がして、默つてしまつた。

「困つたら、みんな田舍へ歸ればいい、田舍へ行けば、米はあるし、みんな親切にしてくれるから、くよくよ思ふな」

暫くすると、父は莨の煙を眺めながら氣まぐれ獨言のやうに、靜かに云つた。

＊　＊

年とつてから東京へ出て、まだ四年にしかならない父には東京は淋しいところである。氣に話せる友人がない。行きたい場所がない。往來する親戚がない。隣り近所はくつつき合つてゐながら、敵同志のやうに、言葉もかけない。父は東京に移り住んでから異國にゐるやうに孤獨である。田舍へ歸りたい。田舍へ歸れば呑氣な樂隱居ができるからばかりではなく、長男が出征してしまつては、見ず識らずの人々の間では、不安でたまらない

――さう、いつも考へるが、その反面、子供等がもつと出世しなければ、おめおめ故郷へは歸れないといふ見榮もある。

母も同じ心だつた。ただ違ふのは、新一が出征したのを機會に、母は近所繕りと親しくなつたことである。近所で、出征した杉村さんのお母さんになつた。國防婦人會にも加入した。また防空演習が幾度も行はれて、その都度、母は物々しい恰好で、近所の人々と共同作業に從事した。ふだんは、怒つたやうな表情をして、とりつく嶋もないやうな東京の人々も、よく接してみれば、故郷の人々と同樣であることを發見した。故郷の人々よりあつさりしてゐて親しみ易い。殆どみな田舍に故郷をのこしてゐる人々であるからだらう。

母には、若い者のいふ東京のよさが、だんだん分るやうな氣がして來た。そして、美代が裁縫するについても、近所の奥さまやお神さんに、仕立物があつたら娘にさせて下さいと、赤面せずに頼めたこれは、故郷では體面や見榮があつて、近所の人々も「出征した杉村さんの妹さん」に、仕事を與へることで、銃後の後援をするかのやうに、勝手口の方へ縫ひたへ餓死しても頼めることではない。なほし物などを持つて來てくれた。

「東京つていいわね、どんなに暮しを下げても氣がねするところがなくて……」

さう母が美代にも云つて、新一の凱旋を待つ間どんな困苦にも耐へられさうに安堵の微笑をするやうになつたが、間もなくまた、次男の誠二に召集狀が來た。

父は、誠二が未教育で、軍籍にあるとは知らなかつたから、驚くとともに、家でもものあますやくざな誠二が、お國へご奉公ができるかと靑くなつた。

「名譽なことだ、名譽なことだ」

父はさう呟きながら、おろおろ座敷に立つたり坐つたりしてゐたが、誠二の居所が分らないのに當惑したからである。

それは誠二が家出して一年目であつた家出したのには、次のやうないきさつがあつた。

父が退官して上京する日まで、全く迂闊な話だが、誠二は慶應大學に入學してゐるやうに僞つて、美術學校の彫刻科に通學してゐた。誠二は美術學校を希望したからとて、父が許可する筈はないとして、非常手段をとつたのであるが、父はそれを知つた時、何年間も財產を講にすてたやうに悲しみ、直に退學しろと激怒した。しかし、もう二年すれば卒業することであり、卒業すれば、中學校の教師にもなれるからと、新一がとりなしたので、父もやむなく退學させることだけは思ひとどめた。

「誠二は中學校で優等ばかりだつたのに惜しいことをした」

それが、父の愚痴であつた。

誠二は音樂が好きだつた。暇さへあれば、二階で蓄音器をかけて、洋樂を聽いてゐた。その音樂が父には耳障りでしかたがなかつた。譜の分らない音樂が、誠二を墮落させたやうで、二階で蓄音器が聞え出すと、階下で、父の顏面神經はぴりぴり微動する。

「おい、いいかげんにせんか」

たまりかねて、下から敏鳴る。誠二はまた、朝寢で、それが父の神經にさはる朝つぱらから、ラヂオ體操をガアガアかけて暗に早起きするやうに促すが、通じないらしく、家の者と一緒に朝食をとつたためしがない。しかし、父は誠二に面と向きあつては、小言も注意も云はなかつた。誠二が起きると狹い庭へ降りて、避けるやうにする。見失つた息子といふ形であつた。

誠二は卒業しても就職しなかつた。父はまた欺かれたやうに感じた。あれはやくざだと自らに云ひきかせて、我慢した。勿論誠二の彫刻の上での苦勞などは、分る筈もなく、やゝもすれば弟を庇護する新一をも、物足りなく感じて、「男一匹、自分のめしぐらお稼ぐ人間になれ」と、不平をもらした。

誠二は友人のアトリエにかよつて制作をした。夜おそく歸る日がつづいた。それを、父は夜遊びと誤解して、或夜、彼の歸るを待ち構へてゐ、自ら玄關を開けて、

「親を馬鹿にするにもほどがあるぞ、もう家へは入れん。勘當するぞ。出てうせろ」と、敏鳴つた。

「出て行きます」さう、誠二はすなほに闇夜に消えて行つたが、その落着いた態度が、益々親を無視するやうで、びしりと戸を締めたが、なかなか怒がおさまらなかつた。

誠二はアトリエを持つ友達の處へ厄介になつたが、勤め先の新一へ電話をかけて打ち合はせたところ、父は誠二の顏さへ見れば不愉快になるのだから、當分勘當されたまま、家に歸らない方がよからうと、いふ意見であつた。そして、その通りに實行した。

友人は誠二の彫刻の方の才能を認めてゐたから、喜んで世話をした。兄も僅かながら經濟的な援助をしたので研究をつづけられた。從つて、誠二の動靜は、新

アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Redords
http://www.jacar.go.jp/

一を通じて、母や妹には分つたが、父だけは、彼が東京の街を宿もなくさまよつてゐるものと、考へてゐた。
「あのやくざ者も、これで親のありがたさが分るだらう」
さう強がりを云つたが、父は、毎日新聞の三面記事を注意した。誠二が悪事でもしないか、又は、のたれ死でもしないか、内心心配でならなかつた。
新一が應召すると、誠二も就職して、家をすけなければと決心した。新一にも、家のことは心配しないで下さいと、約束して見送つた。しかし、誠二は彫刻はすてたくはなかつた。彫刻をすてずに就職するといふのは、困難なことであつたが或劇場のセット係に職を得た。そのために、毎月、僅かではあるが、生活の補助として、父には内證で、母にきまつた額の金を渡すことができた。
「新一が凱旋したら、美談としてお父さまに勘當をゆるしてもらうのですね」
母は内證で誠二に會つて、そんな風に微笑したが、父はそれほど頑迷な老人のやうに、家族の者から扱はれてゐた。
さて、誠二の召集狀が届いて、住所が分らないと、おろおろしてゐる父を見て母は美代と顔を見合はせる思ひだつた。眞實を語るべきか、語つたら目出度い門出の前に、却て氣まづい思ひをするのではなからうか、自然を待たう――そんなつもりで、美代に、心當りを探がさせるといふことにはからつた。

＊　＊

その町内では、息子を二人出征させるのは、杉村さんがはじめてだといふので、新一の場合よりも、ずつと盛大に見送つてくれた。

父も新一の出征する時には、
「これが田舎なら、四斗樽のおかがみをあけて祝ふのだが」と、見ず識らずの人々ばかりの東京の生活をさびしんだが、
誠二の場合には、
「勿體ないことだ、こんなにお世話になつて」と、喜んで町會や在郷軍人や國防婦人會の人々に、人のよささうなお辭儀をして廻つた。
實際、新一の出征から一年ばかりの間に、町の人々たちの間に親密の度もずつと深くなつてゐた。これは、確かに事變のよい効果であるが、同じ町内に住む一軒一軒が、白々しく心に垣を構へて暮す習慣が、改良せられさうに見える。町内の人々が仲よく一致團結して、例へば、飛行機から爆弾が投下された時に助け合はなければならないやうに、日常生活にも、協力しようといふ風潮が仄かに現はれて來た。そのことが田舎から出て來た孤獨な父には、ぼんやりながら、暖かに感じられて、ありがたかつたのである。
「不自由なことはありませんか」
さう在郷軍人が時々慰問に來てくれる。町内で行き合ふ人も、父に丁寧に挨拶して、
「戰地におらつしやるご子息方からお便がありますか、ご健康で……ご苦勞ですね」と、話しかける人もある。
母はまた國防婦人の服裝して、よく町内の婦人方と出掛ける。二人の息子を戰場へ送つた母といふので、みんなも尊敬するのであらうが、母も田舎者である身を忘れて、自信にみちて、國防婦人會の仕事にたづさはれるらしかつた。町内で、譲らない立派な婦人方と親しさうにしてゐる母を、父は偶然見かけて、歸つて來るなり美代に、
「ばあさんも、なかなか活動してゐるらしいぞ」と、目を細くして喜ぶ。母には
「京に田舎ありつて、こんなことを云ふのかなア」と、戰線にあるといはれる立派な雰圍氣が、銃後にも次第に滲んで來たことを、そんな風にしんみりと云つて老眼鏡を丁寧に拭ふのだつた。
「あれ等が凱旋するまで、この家を動かれないな」
さうも云つた。たつた三人の住むには廣過ぎる家であるが、家主が家賃を二割引いてくれたといふことよりも、故郷に歸らなくても、もう不安を感じない、このご近所で、みんなが庇護して下さるから安心だといふ、心をそんな風に云ひあらはした。
しかし、父と母とには違つた不安があるらしい。
父は新一の出征した場合には、明治神宮にお詣りもしなかつたが、誠二が出征してからは、週に二三回は必ずお詣りに出掛ける。神棚にも朝夕、掌を合はせるやうになつた。
「あんなやくざ者が、お國のために立派にご奉公ができるか、心配だ。あんな風に盛大にして送つていただいたからな」
或夕、父は夕食の席で、さう吐息した晩酌も、もうまるで形式だけで、量を少くしてゐた。
母とて同じ不安があつたから、いさ出征する日の朝、
「誠二、兵隊に行つたら、朝だけも、せめて人並みに起きて下さいよ」と、そつと注意した。すると、誠二は瞬間意味が通じなかつたやうだが、目をしばだたいて、
「いつまでも、子供だと思つてるのですか」と微笑した。大丈夫立派にやつて來ますといふ意氣を、全身で語つてゐた。
やくざだと父は云ふが、誠二の誠實なことは、母は信じられた。しかし、父は僅かな酒に顔を染めて、
「わしは、あれが戰死するやうに神様にお願ひしてゐるのだよ。支那兵に捕虜にでもなつたら、すまないことだからな」
と、重ねて云つた。
そばで夕食を食べてゐた美代は、
「まあ、お父さまつたら――」と、思はず茶碗を膝において、父の顔を見上げた。そんな心で、明治神宮にお詣りするのかしらと、悲しかつたが、美代には深い父の愛がまだくめなかつた。
母には、しかし、父の深い感情が痛いほど感じられて、
「大丈夫です。あの子も家のことを考へて、不名譽なことはしませんでせう」とやはり目をしばだたいてゐた。
「わしも、あの子たちが、立派にご奉公するためには、わしが老いこんでゐないで、滅私奉公になるやうなことをしないと、いかんと思ふのだが――」
やくざな息子が、戰地で辱かしいことをしないようにするには、自分がまごころをつくさなければと、父は信じこんだやうである。
しかし、母には異つた苦勞があつた。物價は上るし、誠二の補助がなくなつて、僅かな恩給では、臺所だけでも支へ切れなくなつた。毎日のきりもりに心を勞した。父には内證で風呂敷包を抱へて質屋の戸をくぐつた。
美代はそんな母を見るとじつとしてゐられずに、外へ職業を持たなければと決心した。お裁縫賃ではもう補ひきれさうもない。ただ氣懸りなのは、父が相變らずに頑固なことをいつて、反對する點である。
美代は母に相談した。母は父の性質をのみこんでゐて、軍需會社の女事務員ならば、國家へご奉公するのだと解して、許してくれるだらうといふ意見だつた。母は、國防婦人會で親しくする一人の婦人が、或軍需會社の専務の夫人であることを思ひ出して、お頼みしてみようと考へるのだつた。

＊　＊

平時には容易に行はれないことが、戰時はすらすらと實現せられる。
美代はその専務の會社の秘書課につとめることになつた。兄が二人出征してゐることや家庭の事情を知つて、専務は美代の月給を奮發してくれた。
美代はこれで、兄たちが凱旋するまで家族全部が最低の生活を保證せられたことを喜んだが、それにもまして、自分の働くことも、結局はこの戰争に參加してゐるのだといふことが、誇らしかつた。兄たちの出征した後の肉親の生活を支へる誇りの他に、戰争に參加してゐるのだといふ光榮を、どう誰に傳へたらよいか
それ故、美代は潑剌として、めきめき美しくなつて行つた。
その頃、父も町の防護團に加はつた。
「この服は、震災前のものだが、色がはげて國防色になつた」
さう頬笑んで、袖口のやぶれかかつたのを氣にしながら、古い背廣を着て、巻きゲートルなどをつけて出て行つた。
防護團のなかに混つて、胸を張つた父を、ふと見かけると、十も若くなつたやうで、美代は見なほすのであつた。白い髪が、よく似合つて、防護團の團長にも應はしい。二人しかない息子全部戰地に送つたといふ自信が、凛々しく見せるのであらう。
防護團の方でも、父を尊敬して、尾崎愕堂翁を背を高くしたやうですなと、なれなれしく話しかける人もあつた。父は何かしら得意になつて、故郷から遠く離れてゐることなど忘れてしまつたやうである。そして、いつも機嫌がよかつた。
或夜、夕飯の後、美代がはじめての月給から銀座で買つて來た季節の果物を、父母と一緒に食べてゐると、父は何かを思ひ出したやうに、
「誠二の蓄音器は、今でも戸棚にあるか」
と訊ねた。まだ誠二が家出しない前に、父がやかましいからと怒つて、誠二の外出中に二階からおろして、階下の戸棚にしまつたものである。美代は、折角、何年振りに樂しい夕を、その悲しい記憶で毀してしまふのを殘念に思つたが、
「え〻」と、簡單に答へて、さぐるやうな目をあげた。
「あつたら、あれを誠二に送つてやれないかね」
「戰地へですの？」
「お前會社から、恤兵部へきいてもらへないかな。わしは二三日前から、新聞で戰線から歸つた文士の記事を讀んで、誠二の部隊へ送つてやりたいと思つたが、無理かな」
美代もその文章は讀んでゐた。戰線の報告は、それ以外に、兄たちを偲ぶ術がないかのやうに、殆どみな讀むのだつた。その文士が書いてゐたなかに、戰線の兵隊が音楽を聞きたがつてゐる、「父よあなたは強かつた」といふ唱歌を歌つてあげたら、みんな涙を出した、一部隊にせめて一臺蓄音器があつたら、どんなに兵隊は慰められるだらう――と、いふやうな意味のことをくどくど述べた部分があつた。美代は、あ〻、あのことだなと思ふと、
「吃度送れると思ふわ、恤兵部で聞いていただきますわ、盤でさへ金屬盤ができてるつてことですもの」と、いそいそ答へたが、
「誠二兄さんは、いつも音楽を聴いてお仕事をはけんでゐましたから」と加へた。
美代は萬一、蓄音器を戰線へ送れないにしろ、あんなに嫌ひだつた蓄音器を、誠二に送らうとする父の心を、兄たちが知つたら、どれほど喜ぶか知れないと、嬉しくて飛び立つやうに、
「出してみますわ」と、戸棚の中から、色々の物の下からポータブルを引張り出して、埃を拂つた。
そして、電燈の下へ、父の嫌ひなその小さい機械を持ち出して、使用に耐へるか、一枚の盤をかけて見た。古いメルバのアヴェマリアが美しく流れ出した。
父は音楽は分らなかつたが、思ひがけなく胸が熱くなるやうな氣がした。そして、頭を垂れて、じつとその音を聞いたりすると、不思議なことに、あんなに、やくざだと思つた息子のために、何かに祈りたいやうな神妙な心になつた。
母は葡萄を盛つたお皿を前に、兩掌を膝において、目に涙を一ぱいためて、廻轉する盤を茫然と眺めてゐる。美代も、この音楽にあはせて合掌し、兄たちの戰勝を遙かに祈らうと思つた。

興亞建設

興せよアジア
築けよ健康
豊富なる資源は
錠劑わかもとにあり
若き血潮いや増しに
細胞は生々と蘇へり
病敵を斷乎制壓
響け凱歌
建設へ高らかに

薬價 廿五日、量 一圓六十錢

胃腸 滋養 ともかわ 錠劑

東京麻布區 わかもと本舗

讀者のカメラ

⇧ 白衣勇士の速記講習

秋田市 蒲田義夫

秋田陸軍病院の白衣勇士三十五名は、このほど秋田家政女學校主催の速記法講習會に出席した。女學生に混つた受講勇士は、鉄鋼を握つた逞ましい手に、或は鉛手にペンを握り明日の職業戰線への出動準備に精進した

⇨ 慰問袋を送りませう

福岡市 青木 進

『兵隊さん有難う』と銃後國民の感謝は慰問袋となり戰地へ送られる。このほど福岡縣主催で募集した慰問袋基金は續々と全縣の隅々から集まつた。この慰問袋の調製を依囑された同市松屋デパートは學生勤勞奉仕隊の奉仕を得て『一日も早く戰地へ』と荷造りに大奮である

⇧ 曉のラヂオ體操

京都市 稲垣照子

秋の訪れとともに涼しいこの頃の早朝、巷には町内のラヂオ體操が元氣よく氾濫する。京都市室町頭町々内はどらんのやうな寫眞を戰線に働く町内出身者へ送り出征家族の健在を傳へた

復習室

本號からあなたは何を學んだでせうか？

1 白濱温泉療養所はどういふ人たちが治療をうける所でせうか？……（2頁）

2 國立の傷痍軍人職業補導所は全國でいくつありますか？（6頁）

3 こんど行はれる銃後援護強化週間はいつからでせうか？（1頁）

4 温泉療養所や國立職業補導所は何といふ役所で管轄してゐますか？……（2頁）

5 白濱温泉療養所はどんな目的で設立されましたか？……（2頁）

6 特設中等教員養成所及び、特設小學校教員養成所はどんな人たちのために開設されたのでせうか？……（8頁）

7 特設小學校教員養成所はこんど全國で幾ヶ所設けられましたか？……（8頁）

8 國立職業補導所へ入所する資格は？……（6頁）

9 昨年十月三日には有難い勅語を賜りましたが、何に關する勅語でしたか？……（1頁）

10 職業補導所の傷痍軍人が皆で民謡體操をするのは何のためでせうか？……（7頁）

一問十點としてあなたは何點でしたか？

『報週』と『報週眞寫』へ地戰を

⇦ ⇦

戰地の勇士たちは内地の事情を傳へる寫眞や文字を渇望してゐます。『寫眞週報』はかうした勇士に銃後からの贈物として好適のものと思ひます。どうか一冊でも多く戰場に在るあなたの兄弟や友へ送つてあげて下さい。

送り方は二つに折つて帶封をし、『軍事郵便』と明記して一錢切手を貼付し、直接出征部隊氣付でお送り下さい。『週報』と『寫眞週報』を直接あなたの手から戰地の勇士に送り、銃後と戰地を力强く結びませう。

寫眞週報

★表紙

岩打つ波も靜かに南紀の海は紺碧に冴へる。手巻敷岩に錨系を垂れる大公望に混つて釣魚の人たちも竿を持つ。釣の妙味はまた手の不自由な硬直をほぐす自然療法でもある。「おちさん、お魚釣れたら誰に上げるの、看護婦さんに？」「坊ちやん、おちさんにはお魚釣れないのよ」

撮影 鈴木實

寫眞週報（禁轉載）

昭和十四年九月三十七日印刷發行

編輯者 内閣情報部 東京市麹町區永田町 内閣總理大臣官邸内

印刷者 内閣印刷局

發行者 内閣印刷局 東京市麹町區大手町

定價

一部 十錢

半ケ年（前金）二圓四十錢

一ケ年（前金）四圓八十錢

（外國郵便に依る場合は一ケ年九圓十二錢）

（送料不要）

半ケ年分未滿配送御希望の方は一部十錢の割合を以て前金を添へ御申込み下さい

申込所

内閣印刷局發行課

電話丸ノ内（23）三五一一九

振替東京一九〇〇〇

全國各地官報販賣所

東都書籍株式會社

各書店・驛賣店

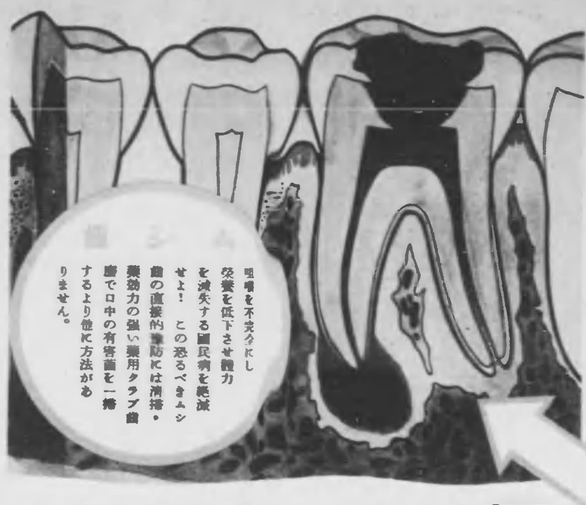
各新聞販賣店

寫眞材料店

アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp/

家庭週報 昭和十三年二月十二日 第三種郵便物認可 明治十四年九月廿七日創刊（毎週一回水曜日發行） 第八十四號

ムシ歯 歯槽膿漏の防止は 口腔の完全清掃に！



最近の進歩せる殺菌劑は單に殺菌のみを目的とするものでなく進んで病源をつきその治療的効果を發揮します。藥用クラブ歯磨に應用せる殺菌劑クロールカルヴアクロール、ヨードチモールはいづれも積極的藥効性能を有するものでその殺菌力に於ても到底他の追從を許しません。ムシ歯、口臭、歯槽膿漏その他の口中疾患を防止するのもこの威力あればこそです

藥用クラブ歯磨

（判型「報道」・A4倍版定價はさ大の書本）

内閣印刷局印刷發行

アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp/